

THE NEW ザ・ニュー・ゲート GATE

風波しのぎ
Kazunami Shinogi

08.神刀の継承者

Illustration:魔界の住民



「THE NEW GATE」世界の用語について

●ステータス

LV:	レベル
HP:	ヒットポイント
MP:	マジックポイント
STR:	力
VIT:	体力
DEX:	器用さ
AGI:	敏捷性
INT:	知力
LUC:	運

●距離・重さ

1セメル=1cm
1メル=1m
1ケメル=1km
1グム=1g
1ケグム=1kg

●通貨

ジュール(J) : 500年後のゲーム世界で広く流通している通貨。
 ジュイル(G) : ゲーム時代の通貨。ジュールの10億倍以上の価値がある。

ジュール銅貨	=	100J
ジュール銀貨	=	ジュール銅貨100枚 = 10,000J
ジュール金貨	=	ジュール銀貨100枚 = 1,000,000J
ジュール白金貨	=	ジュール金貨100枚 = 100,000,000J

●六天のギルドハウス

一式怪工房デミエデン(通称:スタジオ)		『黒の鍛冶師』シン担当
二式強襲艦セルシュトース(通称:シップ)		『白の料理人』クック担当
三式駆動基地ミラルトレア(通称:ベース)		『金の商人』リード担当
四式樹林殿バルミラック(通称:シュライン)		『青の奇術士』カイン担当
五式惑乱園ローメスン(通称:ガーデン)		『赤の錬金術師』ヘカター担当
六式天空城ラシュガム(通称:キャッスル)		『銀の召喚士』カシミア担当



目次 Contents

用語解説	003
登場人物紹介	004
ワールドマップ	006

Chapter1 海嵐竜	007
Chapter2 侍の国へ	063
Chapter3 それぞれの思い	149
Chapter4 妖狐襲来	223

ステータス紹介	299
---------	-----

とうどう かんくろう
藤堂貫九郎

566 歳。ハイロード。
シンに匹敵する超絶剣技の持ち主。
ヒノモト十傑の筆頭。

み か づ ぶ ね ち かげ
三日月宗近

521 歳。
お助けNPC 兼 ボスモンスター。
同姓同名の刀が擬人化した存在。

ティエラ・ルーセント

157 歳。エルフ。
「よろすや 月の祠」の店番。
強力な呪いの名残で
髪的大部分が黒い。

シュニー・ライザー

521 歳。ハイエルフ。
ゲーム時代のシンのサポートキャラ。
500 年間シンを待ち続けた。

Main Characters
主な登場人物

さえぐさ かりん
三枝花梨

20 歳。ヒューマン。
奏に付き従う護衛の剣士。
ヒノモト十傑第3席に数えられる。

く じょうかなで
九条奏

13 歳。ヒューマン。
ヒノモトの東を治める名家の姫。
姉の病を癒やす目的で旅に出た。

ユズハ

? 歳。エレメントテイル。
シンに助けられたモンスター。
子狐の外見だが、人型にも変身可能。

シン

本編の主人公。
21 歳。ハイヒューマン。
オンラインゲームで名を馳せ
た最強プレイヤー。
デスゲームクリア後、500 年
後のゲーム世界に飛ばされる。

Chapter 1

海 嵐 竜

THE NEW
GATE

エルトニア大陸

THE NEW GATE

海

ジグルス

竜皇国
キルモント

ファルニッド
獣連合

聖地カルキア

レンツ

ラルア大森林

ベイルーン

バルメル

亡霊平原

ベイルリヒト
王国

九条の城

霊峰フジ

ヒノモト



「調子が悪いなら、宿で休んでいいんだぞ？」

「くう……」

シンは小さく鳴いた肩上のユズハから、大丈夫という意味を受け取って、軽く撫でるとどめた。聖女ハーミイを生け贄にしようとした瘴魔との戦い以降、ユズハは体調が悪いのか、シンの肩にくてつと寄りかかることが時折あるのだ。

「お連れ様はお体の調子が悪いのです？」

「本人は大丈夫って言うてるんだけどな。熱があるわけじゃないからひとまず様子見してるんだ」
ヴィルヘルムにハーミイたちを任せ、シンとシュニーはバルメル黄金商会にベレットを訪ねていた。ジグルスに戻るために船を使うことになったからだ。

バルメルから出ている船には、大陸北部（エスト）方面に向かうものも多い。陸路では時間がかりすぎるので、海路でジグルスに近い港町まで行き、そこからジグルスに向かうことになった。ドラゴンを使った空路は最終手段なので、今回はなしだ。

「それで、船の手配はどうなのですか？」

シュニーが聞くと、申し訳ないとベレットは頭を下げた。

「私としてもお力になりたいのですが、あいにくと我が商会の船は出払ってしまして。ですが、

ちょうどエスト方面に向かう船があります。途中で補給も兼ねて別の港に寄りますが、我々の商船を待つよりも間違いなく早く着きます。いかがでしょう？」

交易のための物資と、人の両方を運ぶ船だという。それなりに高い身分でないと乗れないそうだが、ベレットの紹介があれば乗せてもらえるらしいかった。

「月の祠の紹介状や、連れの身分とかは使いたくなかったから助かる」

月の祠の紹介状なら身分証としては十分。もしくはハーミイの名を使えば、船に乗ることはできるだろう。ただ、後々面倒事の種になりそうだったので、できれば避けたかった。

黄金商会副支配人ベレットの紹介状もそれらに引けを取らないが、商売上の取引相手とでも言えればまだ使い勝手がよい。

Aランクの冒険者ヴィルヘルムや教会所属の騎士ケーニツヒがいるので、アイテムの取引がある
と伝えれば信憑性も高くなる。

「出発は明日になりますが、よろしいですか？」

「ああ、あまりのんびりするわけにもいかないからちようどいい」

「お部屋のほうは、空きの状態を後ほど連絡いたします」

「できれば個室を頼む。あまり顔を見られたくない仲間がいるんだ」

「承知しました。ではしばしお待ちを」

デスクの引き出しを開け、ベレットは用紙にペンを走らせる。書き終えたそれを黄金商会の印が

入った封筒に入れ、封蝋ふうろうを使って封をした。

「こちらを船長にお見せください。私から話は通しておきます」

「ありがとう。世話をかけてすまない」

「ハイヒューマンの方々のお役に立てることは、我らにとって最上の喜び。どうか、お気になさらず」

笑みを浮かべながら礼をするベレットの表情は、実に堂々としたものだった。そこに、悪感情はひとかけらも存在しない。

シンはもう一度礼を言って、黄金商会后にした。

+

シンたちが黄金商会で話をしていたころ。ティエラ、フィルマ、シュバイドの3人は、食糧や道具の買い出しに来ていた。カゲロウはいつも通りティエラの影の中だ。

500年眠ったままだったフィルマは、通りの賑わいに頬を緩めている。

「やっぱり貿易が盛んなだけあって人が多いわね。道行く人も明るい顔をしてるし、ちょっとだけほっとするわ」

「ほっと、ですか？」

フィルマのつぶやきに疑問を返すティエラ。フィルマは、小さく笑って答えた。

「私が覚えているのは、天変地異てんへんちいからの復興を目指していた時代までなのよ。あの頃は小さな地震が起こるだけで、パニックになる人もいたから」

フィルマの言葉に悲壮感はなかった。

「世代が変わったことで、当時のことを忘れてしまったというのもあるのだろう。だが、多くの人々の努力が積み重なり、今がある。今も昔も、人というのは存外しぶといものだ」

フィルマが羽目を外しすぎないようにと同行したシュバイドが、笑みを浮かべながら言った。かける言葉が見つからず、黙ったままのティエラ。

「そうね。実感してるわ。それにしても、シンとシュニーを2人つきりにしてあげるなんて、シュバイドも気が利くようになったじゃない」

「正確には2人と1匹だ。別段、何か意図があったわけではない。お前を放っておくほうが危険と判断したまで」

「ちょっとそれどういう意味よ」

「かつての経験から言っておるのだ。胸に手を当てて考えてみるがいい」

シュバイドは半眼でフィルマを見ていた。どの口がそれを言うのか、と視線が語っている。

「私をトラブルメーカーみたいに言わないでよ。まあ、ちょおっと羽目はめを外しすぎたことはあったけど」

心当たりがあるのだろう。フィルムマの視線が泳いでいた。

「まあまあ、おふたりともそのあたりで。せっかく街に繰り出したんですから、いろいろお店を見て回りませんか？」

「それもそうね。必要な物はリストアップしてあるし、ささっとすませちゃいましょう」

「やれやれ」

ティエラの提案にフィルムマが食いつき、シュバイドは苦笑する。シュバイドとしても、喧嘩をしたいわけではない。

フィルムマはさっそく食材に目を向けた。

「ティエラちゃんはこういう目利きって得意なほう？」

「ある程度なら。一応、師匠に鍛えられましたし。フィルムマさんはどうなんですか？」

「料理は作るうと思えば作れるけど、大味なのよね。てことで、食材の選別はティエラちゃんに任せるわ」

シュバイドも料理に関してあまり頓着しないので、このメンバーで最も素材の良し悪しがわかるのはティエラだった。

そうして大量に買い込んだ素材は、シュバイドが持つことになる。

「すごい量ですけど、大丈夫なんですか？」

袋一杯の食材を抱えるシュバイドを見て心配するティエラに、フィルムマは軽い口調で言う。

「気にしなくていいのよ。このくらいの荷物でどうにかなるような奴じゃないから」

「問題ない。人通りのないところで、アイテムボックスにしまう」

実際、シュバイドは難なく袋を持っていた。

「ところでティエラちゃん。聞きたいことがあるんだけど、いいかしら？」

「はい、なんですか？」

「ティエラちゃんがシンに同行してる理由って、なんなの？」

「ふむ、確かに気にはなっていた。それに連れている神獣は、明らかにティエラ殿の調教師としての力量を超えている」

フィルムマの問いにシュバイドも続けた。

「えっと、ここで話さなきゃだめですか？」

「むしろこういう場所のほうがいいわ。雑踏の中って、内緒話をするにはうってつけなのよ」

様々な声が飛び交う大通りは、フィルムマの言うとおり、誰が何を話しているかなどほとんど判別がつかない。さらに言うなら、ここには教会の騎士や白貌の槍使いもいない。

「私はシンやシュニーの身内だから、そういうことは知っておきたいの」

フィルムマもシュバイドもシン直属の配下だ。ゆえに、配下でもないティエラが同行していることに疑問を感じていた。

単なる興味本位ではないと伝わってきて、一度しっかりとうなづくティエラ。

「わかりました。最初は師匠、シュニーさんに助けられたことが始まりだったんです」
シンが呪いを解いてくれるまでのことを、簡単に話す。

「——なるほどね。確かに【呪いの称号】^{カースドギフト}は街で解いてもらうのが一般的だったから、手の出しようがないわね」

「うむ、私も調べたが、詳しい方法はわからずじまだった」

「シンは知ってたみたいでしたけど、皆さんは知らなかったんですか？」

シュニーも含めて、誰も【浄化】の習得方法を知らないと言いつつ、ティエラは驚いた。

「シンが習得したのは知ってたけどね。習得に必要なアイテム探しは手伝ったけど、最後はシンだけでやってたから、細部までは知らないのよ。元々滅多に使うスキルじゃないから、シンが覚えるだけで用は足りたし。たぶん、他の知り合いも似たようなものでしょね」

「だろうな。そもそもあの頃は自分で覚えなくても、今では聖地と呼ばれるようになった街に行けば、簡単に解除できた。わざわざ労力を使う必要もなかったのだ」

「なんというか。すごいですね」

呪い持ちが普通に出入りでき、簡単に解呪して出てこられる街というのが、話を聞いてもティエラには想像できなかった。

『栄華の落日』^{えいが}以前の世界を知っているシュバイドたちも、ティエラの驚きは理解できた。

「ところで、ティエラちゃんはシンのことをどう思ってるの？」

「え？」

突然切り出され、ティエラは呆けたような返事をした。

「だってそうでしょ？　ずっと店から出られないと思ってたところにさっと現れて、何の報酬もなくに呪いを解除。そんなことがあって、気にならないわけじゃないじゃない」

妙にキラキラした笑顔でそう断言するフィルマ。食いつかずにはられないようだ。

「あきらめていたところにさっそうと現れた王子様、といっても過言ではない、でしょ？」

「えっと……確かに恩は感じてますよ？　でも、ほ、ほら！　シンには師匠がいますし！」

「この世界では、一夫多妻は普通よ？　まあ、エルフはそういうの、あまり好きじゃないみたいだけれど。でも、本当に恩だけ？」

「あ……ええと……」

フィルマの剣幕にたじたとするティエラ。しかし、言葉を濁すばかりではっきり否定しないところが、すでに答えになっていた。

「フィルマよ。あまり人の色恋に口を出すものではないぞ」

「わかってるわよ。これ以上は止めておく。でもティエラちゃん、これだけは言っておくわ」

「は、はい」

ニヤついた笑顔から一転、真顔になったフィルマは、真剣な口調で言った。

「自分の気持ちははっきりさせておいたほうがいいわよ。後悔してからじゃ、遅いから」

「っ!!」

心を見透かされたような言葉に、ティエラは息を呑んだ。

「ごめんなさいね。余計なお世話だってことくらい、わかっているのだけど」

「……いえ、本当のことを言うと、自分でもまだ答えが出ていないんです」

困ったように苦笑して、ティエラは言う。

フィルマはその様子を、優しい笑みを浮かべて見ていた。

(さて、シンはどういう答えを出すのやら)

女性陣2人とは別に、シュバイドはそんなことを考えていた。

+

「とりあえず、足は確保してきた」

黄金商会から帰ってきたシンたちは、他の面々に、ジグルスに向かう船について伝えた。

ティエラたち3人だけでなく、宿に残っていたヴィルヘルムとハーミイ、さらにケーニツヒに付き合って外出していたミルトもそろっている。

「出発はいつごろで?」

そう聞いてきたのはケーニツヒだ。

「明日の朝で、メデイエル号って船です。そちらはもう?」

「教会への連絡はすんだ。伝えてあった通り、レシエルの街に迎えが来るはずだ」

念のための質問に、ケーニツヒがうなずいて答えた。

迎えといっても、その大半は『頂の派閥』の拠点に向かうことになっている。

選定者をそろえ、一気に制圧するらしい。最も危険な瘴魔をシンたちが倒したからこそ可能な作戦だった。

「はあ、僕はシンさんと一緒に行きたかったなあ」

「迷惑かけたから償うって言ったのはお前だろ? しばらくは奉仕活動を頑張れ」

ほやいたミルトにシンが声をかける。

操られていたとはいえ、ハーミイをさらったのは事実。なので、ミルトは一定期間教会で奉仕活動することになっていた。もちろん今回の拠点強襲作戦にも加わる。

「さて、他に何か伝えておくべきことはあるか? ないなら、明日も早いしそろそろ休もう」

誰からもとくになく、各自が割り当てられた部屋に戻っていく。

部屋割はシンとユズハ、シュバイドで一部屋、シュニーとフィルマで一部屋、ケーニツヒとヴィルヘルムで一部屋、ティエラとミルト、ハーミイで一部屋だ。

賑やかなミルトはティエラやハーミイと仲が良く、護衛にもなるので一緒の部屋になった。ティエラの影の中にはカゲロウもいるので、戦力は十分以上だ。

「にしても、ユズハはまだ体調が悪いのか」

「くう……」

「モンスターが体調を崩すか。状態異常ではないとなると、見当がつかん」

シユバイドも心配するが、ユズハからは相変わらず大丈夫という念が伝わってくる。

シンはきつくなったら言うように伝えて、その日は眠りについた。

+

翌日、予定していた時間よりも早く、シンは目を覚ました。右腕に身に覚えのない重さを感じたからだ。

「前にもあったな……ユズハ、だよな？」

【分析】^{アナライズ} でしたっかりと確認して、シンは隣で眠っていた少女に視線を向けた。

少女の正体は、人型になって眠るユズハだ。ただ、その姿はシンの知る幼女モードではない。

見た目は中学生くらいか。背丈は150センチほどまで伸び、体形にも女性らしい起伏が見られる。背中まで伸びた銀髪が、窓から入ってくる日光でキラキラ輝いていた。

耳と尻尾^{しっぽ}があるのは相変わらずだ。

「体調が悪かったのは、これの前触れかね」

抱え込まれていた腕を抜きながら、空いているほうの手で毛布をかけてやる。するとユズハがゆっくりと目を開いた。

「……いない」

シンの腕があつたところを見つめて、手をさまよわせるユズハ。寝ぼけているのか、少しだけ移動したシンに気づいていないようだ。

その表情は、親を探す迷子のようにも見えた。

のろのろと体を起こすと、ユズハの体にかかっていた毛布が落ち、隠れていた裸体^{あら}が露わになった。

バルメルの朝は少し肌寒い。シンはさっと拾い上げた毛布でユズハをくるんだ。

「……いた」

毛布を^{いっしょに}顧^こだにせず一言つぶやいて、ユズハはシンの膝に頭を置くと、寢息を立て始めた。何とも幸せそうな表情を浮かべている。

「いやまで、なぜ寝る！」

このままでは困るので、とりあえず服を着てもらおう。以前は服を着たまま子狐モードになり、再度幼女モードになると服は着た状態だったのだが、なぜか今は着ていない。

服自体はカード化した状態でそばに落ちていたので、新しく出す必要はなかった。

「とりあえず、事情を聞こうか」

「ん？」

「いや、その姿のことな。やっぱり力が戻ったからか？」

「うん。まだ力が馴染んでないから、今はこれが限界」

ユズハの話によると、体調が悪かったのは、力の回復に合わせていろいろと知識が復活したせいだった。大量の記憶が戻ったことで、頭がパンク状態になったらしい。

本来の6割ほどまで回復したようで、完全に力が馴染んで記憶が戻ればもう少し成長した状態になるという。

「表情が硬いのもそのせいなのか？」

「くう？」

そう？　とでも言いたげに、ユズハは首をかしげた。

眠っていた時の幸せそうな表情をのぞけば、ほとんど表情に変化がない。完璧なボーカーフェイスだった。

改めてユズハのステータスを確認すると、レベルは600を超え、ステータスもかなり上昇していた。数値だけを見れば、レイドランク3に該当する強さを持っている。

「とりあえず、シュニーたちには知らせておいたほうがいいな。子狐モードにはなれるのか？　いきなり大きくなると驚く人がいるから、可能ならそっちでいてほしいんだが」

「大丈夫」

そう言ってユズハはシンの目の前で変身して見せた。

それを確認して、シンはシュニーに心話で呼びかける。すでに起きていたシュニーに、フィルムマも呼ぶように伝え、シン自身はシュバイドを起こした。

ティエラはハーミイと一緒に、後で伝えることにする。

「へえ、ほんとに強くなってるわね」

ユズハのレベルを見たフィルムマが、感心したように言う。

「やはり、最終的にはレベル1000になるのでしょうか」

シュニーは最終段階が気になるようで、顎に手を当てて考えている。

「エレメントテイルが味方というのは、心強い限りだ」

実際に戦ったことがあるので、シュバイドは頼もしさを感じているようだ。

「とくに何か変わるわけじゃないから、これまで通りで頼む」

「よろしく」

話を終えるころには、出発の準備が始める時間になっていた。

シンたちは他の面々と合流し、一階の食堂で朝食を取る。食べ終わると、まだ少し早かったが港に向かうことにした。

シンはヴィルヘルムと並んで歩く。

「ハーミイさん、少し元気になったな」

「みたいだな。つかなんて俺に聞く?」

「2人で留守番してからじゃないか? 笑うようになったの」

ハーミイの視線がヴィルヘルムに向けられることが、明らかに多くなった。何かあったと考えるのは当然だろう。そんな彼女のそばには、ケーニツヒとミルトが護衛として立っている。

「少し話をしただけだ。何かあったわけじゃねえよ」

「あの様子を見たら、そうは思えないけどな」

「知るか」

これ以上はまずいかと、シンは追及をやめた。そのまま他愛のない会話をしながら歩いていくと、視線の先に船の帆が見えてくる。

出航が近いからだろう。港では屈強な男たちが、荷物を船内へと運び入れている。

「混んでるねー。ところで僕たちが乗る船ってどれなの?」

ミルトがきよろきよと周囲を見回して尋ねた。

「あの一番でかい船だ。昨日のうちに確認しておいたから間違いない」

シンは港に停泊している船のうちのひとつを指差す。周囲の船より一回り以上大きく、見ただけでかなりの物資を輸送できそうなのがわかる。

「もう乗り込んでる人もいるみたいね。私たちも行く?」

「とくにやることもないし、今のうちに乗ってしまおう」

ティエラに答えながら、シンは船に向けて歩を進める。一行が乗船口に着くと、乗客のチェックをしていた船員の1人がやってくる。

今にもボージングを始めそうな、鍛えられた筋肉を身に纏った大男だ。

「メデイエル号へ乗船される方でしょうか?」

「はい」

「乗船証か、紹介状はお持ちで?」

威圧感のある見た目とは裏腹に、礼節のある対応だった。

シンが代表して、ベレットから預かっていた紹介状を見せる。船員は紹介状を受け取り、丁寧に開いて内容を確認した。

「……はい、結構です。ようこそメデイエル号へ。お部屋までご案内いたしますか?」

「お願いします」

船長に見せるように言っていたベレットだが、船員まで話は通っていたようだ。

部屋に関しては、船の大きさに見合った客室があるようで、事前に伝えたシンたちの要望もすんなり通っていた。

屈強な船員の背を追って、シンたちは船内を進む。到着したのは、頑丈な扉のある部屋だった。

部屋割りは男女で分かれる形だ。ハーミイは変装しているが、なるべく人目に触れないように奥の部屋を選んだ。

「少し船内を見てくるかな」

「くう」

立ち上がったシンに、ユズハが一鳴きして肩によじのぼる。

「じゃあ、一緒に行くか」

シユバイドにも声をかけて、船内を歩くことにした。荷物の搬入の邪魔にならないよう通路を選びながら、どこに何があるのかを確認していく。

立ち入れる場所をあらかた見終えたところで、鐘の音が聞こえた。これから出航するという合図だ。思ったよりも時間が経っていた。

そろそろ部屋に戻るかとシンが歩き出した時、曲がり角の向こうから声が聞こえてきた。

「これでやっと、姉上の病も治るのだな！」

「はい、きっと陽菜様もお喜びになるでしょう」

曲がり角の向こうにいたので姿は見えないが、声の高さからして、少女とお付きの侍女だろうとシンは予想した。大きな船なので、従者を伴った客もこれまでに何組か見かけていた。

ちようど客室付近の通路で、周囲が静かだったこともあり、会話の内容まではつきり聞き取ることができた。

察するに、姉のために貴重な薬でも手に入れたといったところか。部外者のシンでもわかるくらい、声は嬉しきで溢れていた。

「手に入れるのには、苦労した、うあつ!」
「え……?」

角を曲がってきた少女が突然奇声を発したので、シンは動きを止めた。視線の先には、驚きを顔全体で表現している少女がいる。見たところ中学生になったばかりといった風貌だ。

身長は140センチくらいと小柄。背中まである炎のような深紅の髪が印象的だった。濁りのない澄んだ黒い瞳が、まっすぐシンに向けられている。

「お嬢様?」

動きを止めた少女の後ろから現れたのは、侍を連想させる服装の女性だった。

黒地に橙色の線で模様が描かれた籠手と脛当て。肩には大袖と呼ばれる防具、胸元には少し小さなめの胴当てをつけている。

身長は160センチ後半といったところ。腰までありそうな黒髪を後頭部で縛り、ポニーテールにしていた。

「そちらの殿方が何か?」

女性は髪と同じ色の瞳をシンに向けてきた。その鋭い視線は、彼女の力が見てくれただけではないと雄弁に物語っている。

「いや、なんでもない。少し浮かれ過ぎていたようじゃ。気配に気づかなんだ。そちもすまぬな。わらわの不注意ゆえ、気にしないでほしい」

「はあ……」

女性に声をかけてから、少女はシンに謝った。

空返事をしつつも、少女の回答にシンは内心ほっとしていた。自分を見る女性の目が、少々物騒に感じられたのだ。

「えーと、では、俺はこれで」

「うむ、よき旅を」

シンは軽く目礼してから、シュニーたちのいる部屋へと足を向ける。

部屋に着くと、2人を除く全員がそろっていた。

「ハーミイさんとケーニツヒさんは？」

「船が動き出したとたん、ハーミイちゃんが船酔いしちゃったから、付き添ってるよ」

シンの疑問に水を飲んでたミルトが答える。馬車では酔わなかったが、船はだめだったようだ。

「あまりひどくはないので、横になっていれば大丈夫でしょう」

シュニーが補足した。

「シンは船内を見て回っていたのだろう？ 何か気になるものはあったか？」

「いや、これといったものはないな。怪しい密航者もなしだ」

マップ機能の応用で、船倉の中などに人が隠れていないことは確認済みだ。ゲーム時代はそこにNPCが隠れていて、海賊の出現と同時に中からも襲われるというイベントがあった。

今後の予定を軽く話し合ってから、各自自由行動とする。

シンは外の景色を見ようと、デッキに向かうことにした。

「あ、僕も行くよ」

「私も」

歩き出したシンに、ミルトとティエラがついてくる。ユズハは相変わらずシンの肩の上だ。

船内探検中にもデッキに行ったが、道順を確認しただけだったので、どのような景色が見えるのかシンにはまだわからない。

「デッキに出ると、風が強くなったように感じるな」

「いい風だね」

「あ、何かいるわ！」

デッキの端から海を見ていたティエラが何か見つけた。

シンとミルトもデッキの端に近づいて、ティエラの指し示すほうへ視線を向ける。

「ヒーロールドルフィンだね」

「相変わらずカラフルだな」

ティエラが見つけたのは、ヒーロールドルフィンというイルカ型モンスターだった。

戦隊物をイメージしたのか、常に5、6匹の群れで行動している。赤、青の個体は固定で、残りは黄や緑、白、黒、ピンクといったバリエーションがある。

基本的に、攻撃を仕掛けなければ何もしてこない、ノンアクティブのモンスターだ。

「あ、珍しい。ゴールドがいるよ」

「おお、本当だ」

ミルトが指差した先では、赤い個体を先頭に、青、白、黒、金のヒーロードルフィンが船と並走する形で泳いでいた。金色はなかなか見ることができない。

「一匹だけ、すごく光ってるわね」

「強さはたいして変わらないけどな」

倒すと他の個体より、多少貴重なアイテムが手に入る。プレイヤーからは見つけると運氣が上がると言われていた。

「ん？ おい、ティエラ。どうしたんだ？」

シンが視線を戻すと、ティエラが海面をじっと見つめていた。

「いえ、こうして見ると、地面に足がついてないのを実感しちゃって」

船に乗るのは初めてと言っていたので、不安になってきたのか。

「よほどのことがなきゃ沈まないから、安心しろって」

船には強度を上げるスキルがかかっていて、海棲の巨大モンスターに体当たりされても、そう簡単には沈没しない。

「わかってるつもりなんだけど、慣れるまで落ち着かないわ」

こればかりはすぐにはいかないようだ。

シンたちはしばらく景色を眺めた後、部屋に戻った。

+

航海は順調そのもので、一度港町に寄った以外、これといったイベントはなかった。

あえて挙げるとすれば、通路で話した例の少女と女性に、何度か会う機会があったことくらいだろう。互いの名前も知らないのは不便だと、簡単な自己紹介もした。

独特の口調の少女の名前は九条奏。レベル159の弓術士だ。

侍の女性は三枝花梨。レベル221の侍で、奏の護衛だという。

戦ったわけではないが、シンには彼女たちが、年齢にそぐわない強さを持っているように感じられた。もしかすると選定者なのかもしれない。

「今日はなんだか天気が悪いですね」

「うむ、荒れそうじゃの」

曇天を見ながらつぶやいたシンに、奏が相槌を打つ。その横には花梨もいる。

もうすぐ夕暮れ時だが、ぶ厚い雲に遮られて沈みゆく太陽を見ることはできなかった。

「そういうえば、おふたりはヒノモトに向かうんですよね」

「そうじゃの」

「機会があれば行ってみたいと思ってるんですが、どんな国なんですか？」

せっかくなので、ヒノモトについて聞いてみることにした。国名もそうだが、2人の名前も日本を彷彿させる。

「ヒノモトの起こりは、天変地異によって大陸から切り離された島を、いくつかの集団が治めたこと、と言われておる。現在は東西をそれぞれ九条、八重島の2家が代表として取り仕切っている」
ベイルーンへの護衛依頼で一緒になったドラグニル、ガイエンの語っていた各ギルドは、要所要所を治めるにとどまっているようだ。

「なるほど……ん？ 確か奏さんも九条ですよ」

「その通りじゃ、これでもヒノモトの東を仕切る九条家の人間よ」

「お嬢様、そういうことはあまり吹聴なさらないほうがよろしいですよ」

奏の発言に対して、花梨が苦言を呈した。

「そうじゃが、こやつなら大丈夫じゃろう」

よくわからないが、交流を重ねるうちに、奏には多少信用されたようだ。花梨からも当初のような強い視線を感じない。

ちなみに丁寧語なのは、そうしないと花梨から威圧感たっぷりの視線が飛んでくるからだ。

「自然の多いよき国じゃよ」

「故郷を思い出します。でも、そんな家のご息女が国の外に出ていいんですか？ 護衛が花梨さん

1人だけっていうのも、さすがにどうかと思いますけど」

「何も告げずに飛び出してきたからの。いろいろと事情があるのじゃ」

「九条家の方が冒険者になるなど、前代未聞です」

「そう言うでない。もう手段がないのは花梨もわかっておるから、こうしてついてきてくれたのじゃろ？」

「それは、そうなのですが……」

洪い顔をしている花梨を見るに、奏の言う事情とは、ヒノモトの外に出向かなければ解決できないことなのだろう。

「まあよい。目的のものは手に入れたのじゃ。後は帰るだけよ」

シンたちの降りる港町から、ヒノモトへの船が出ているらしい。

「雨が降ってきましたね」

雲が多かっただけに、降るだろうとは思っていた。予想外だったのは、思っていたより雨足が強く、急に風も強まったことだ。

数滴の雫が落ちてきたと思った直後に、土砂降りの雨となった。強烈な風が吹き荒れ、その煽りを受けた海面が大きく波打つ。

時をほぼ同じくして、シンの感知範囲にモンスターの反応が複数現れた。すさまじい速度で船に